

異所性の骨形成機転に関してひとつの可能性を与えるものと考えられた。

演題 12. 頬粘膜扁平上皮癌の治療成績に関する検討

○奈良 栄介, 笹原 健児, 瀬川 清,
 渋井 暁, 福田 喜安, 横田 光正,
 大屋 高德, 工藤 啓吾,

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座

頬粘膜癌はわが国では口腔癌の約 10% と発生頻度が低く、従って報告も少ない。われわれは 1975 年から 1991 年までの過去 17 年間に、23 例の頬粘膜扁平上皮癌の一次症例を治療したので、今後の治療指針を得る目的で、検討を加えた。症例の構成は Stage I がなく、Stage II, Stage III が各 5 例、Stage IV が 13 例と進展症例が多数を占めていた。一次治療は、17 例が化学療法と放射線療法を併用後に外科療法を行い、4 例は化学療法と放射線療法を併用し、2 例は化学療法と外科療法を併用した。局所再発は 23 例中 4 例にみられ、原発巣手術の 19 例中 2 例 (21%) および原発巣非手術の 4 例中 2 例 (50%) であった。一方、pN (+) は T 1, T 2 症例では N (+) の 6 例中 2 例 (33%) であったのに対し、T 3, T 4 症例では N (+) の 9 例中 6 例 (66.7%) であった。5 年以内死亡 9 例の死因は、原発巣死、頸部転移死などの原病死が 5 例で、他癌死、脳出血死などの他病死が 4 例を占めていた。5 年生存率は全体で 58.3% と比較的良好で、その内訳は Stage II が 20.0%, Stage III が 100%, Stage IV が 60.6% となっていた。なお、Stage II が最も悪いのは症例数が 5 例と少なく、かつ他癌死の 2 例が含まれ、さらに後発転移死が 2 例となっていたためと思われた。後発転移を生じた 2 例は原発巣の浸潤様式がそれぞれ 3 型および 4 型と、悪性度が高かった。腫瘍の発育様式別では他病死の 3 例を除いた場合、内向型の 5 年生存率は 62.3% であるのに対し、外向型は 83.3% とより良好であった。以上のように、予後不良例は発育様式では内向型に多く、またリンパ節転移率は原発巣の大きさに比例して高かった。原則として三者併用療法を行うことにより 5 年生存率は 58.3% と比較的良好であった。

演題 13. 加齢ともなう血圧と循環動態の変化

○高橋 和敬, 藤沢 雅人, 菊池 護,
 高橋 栄司, 小原 敏宏*, 工藤 啓吾*,

岩手医科大学歯学部内科
 岩手医科大学歯学部口腔外科第一講座*

わが国において、超高齢化が加速度的に進み始めている。そして、高齢者の死因の第 1 位は心不全である。このような現状の中で、高齢者の全身状態を把握し、治療に臨むことは、歯科診療上ますます重要なことになってくる。加齢ともなう心行動態を理解することは、治療中の不慮の事故の予防に必要不可欠なことにつながる。今回循環器系の薬剤を全く服用していない健康人を対象に脈波コトコフ音図を表示可能にした自動血圧計 (GP-303S 型) を用いて心行動態の加齢変化を比較検討したので報告する。対象: 20 歳から 70 歳以上の健康人 152 名を対象とした。方法: 血圧、脈波コトコフ音、心負荷係数、心拍出量、心係数、総末梢血管抵抗を測定し、各測定値を各年代ごとに比較検討した。各測定値は臥位で 5 分間隔 4 回測定し最後の 2 回の平均値を測定値とした。結果: 140 ~ 90 mmHg 以下の正常血圧者群でも、収縮期、拡張期血圧とも、20 歳代の血圧と比較して、加齢とともに有意に血圧の上昇がみられた。それに対して心拍数は減少していく傾向にあった。安静時の心拍出量は 50 - 60 歳代まで加齢とともに減少し、それ以降は平坦かわずかに上昇気味となった。心係数も同様の傾向にあった。動脈硬化の進展程度によって遅延してくる脈波コトコフ音時間は、20 歳代に比較して、もう 30 歳代から遅延がみられはじめ、加齢とともにその程度が大となった。総末梢血管抵抗も 50 - 60 歳代で有意に増大した。心筋酸素消費量とよく相関する心筋負荷指数は、安静時において各年代で変化はみられなかった。また心拍出量と末梢血管抵抗の有意な相関から、将来高血圧に進展する場合、2 つのパターン、すなわち心拍出量優位の高血圧、あるいは末梢血管抵抗優位の高血圧に進展する可能性があることが示唆された。

特別講演

抗菌剤を用いたウ蝕治療の新しいアプローチ
 一感染歯髄保存法から難治感染根管対処法まで一

岩久 正明
 新潟大学歯学部歯科保存学第一講座

従来、ウ蝕治療に際しては、細菌感染部を徹底削除して、歯髄にまで及ぶ場合には、断髄や抜髄の処置が行われてきた。しかしながら、若年者の萌出間もない

永久歯などでは、ウ蝕の進行が早く、歯根未完成歯などの場合では抜髄後の完治、根の完成は必ずしも容易ではなく、また、若年にして歯髄を失った歯は、その後長期に渡ってその機能を果たすことは困難なことが多く、特に近年高齢化社会を迎えるにあたり若年にして歯を失うことの問題点は多い。そこで演者は、感染象牙質を残して歯髄を保存したり、感染歯髄の保存についてこれまで研究を進めてきた。その結果、感染部には従来の方法で発見されなかった多くの偏性嫌気性菌が存在することを明らかにし、それらの菌に特異的な抗菌性を示す薬剤を用いることにより、若年者の大部分の症例において感染象牙質を残して、その中の菌を殺して露髄を防いだり、感染歯髄中の菌を殺して歯髄の保存を計ることが可能であることを明らかにしてきた。また、従来露髄例に用いられてきた強アルカリ性の水酸化カルシウムが健全歯髄を広範に破壊することから、それに代って歯髄組織に全く影響を及ぼさずことなく、被蓋硬組織の形成を促す α -リン酸 β -カルシウムを薬剤の基材として用いる新しいウ蝕治療のアプローチを試み、長期的臨床試験によりその有効性を明らかにしてきた。また、従来難治感染根管といわれる症例についても、根尖周囲セメント質に細菌侵入が見られることを明らかにし、本薬剤を用いることによりその殺菌を試み、優れた成績が得られることを基礎的・臨床的研究により確認した。